心理学シリーズ番外編<その7>

～T 教授の観察ノートから～

2009.1.25　　タツノオトシゴ

黒猫のミコの赤い首輪が、白磁のティーカップと好対照で
何か、時間がゆったりと流れていく、そんな午後のひと時です。

Tomy が思い出したように、付け加えて話を続けます。
「私は、何か異次元の世界に行ってきたような感じがするのです」
ウエッジ･ウッドのティーカップの中味を飲み干しながらＳ婦人を振り返りました。
「切り立った山の上にあった建物は、瓦葺のとんがった形をしていたようです」
Tomy は、自問自答しながらピオニーシェイプのティーカップのロイヤルミルクティーを飲み干し、カップに付いているアルファベットの「M&A」の紋章を見つめています。

「これは、英国の『ファイン・ボーン・チャイナ』という陶磁器ですよね？」と言いながら、「この陶器と紅茶、どちらも中国との関係が深いですよネ！」としばらく考え込んでいます。「そういえば、夢の中の風景は、中国か南アメリカの山中の風景に似ていました」と興味深げにカップを見ています。 Ｓ婦人は落ち着いた声で、「きっと過去か未来の外国の風景を見てこられたのでしょうね。でも、鳶になって空を飛び回るなんて、男らしくて素敵な夢ね」さらに、「バラの匂いが夢に出てくるなんて、誰か素敵な方とご一緒にいらしたことがおありなのでしょうね？」と話を続けます。「先ほど仰っていた、『ラフマニノフのパガニーニの主題』というのも、聞きなれない方のお名前ですし、発音からするとロシアの国の人かも知れないですわね？」と問いかけ、皆の視線がそれとなくＴ教授の方に注がれています。

まだ顔色の良くないＴ教授は、「極度の疲労や緊張が、意識の奥底にある遺伝的な過去の世界を思い出させる事は知られているのだが、わしの研究では、未来の世界を垣間見ることは、あまり例が無いのじゃが･･･」と珍しく落ち込んでいる様子です。

すると、それまで黙っていたＣ.Ｇユング君が、「僕のお母さんは、『未来のことを夢に見ることがある』と言っていました」と、急に心配そうな声で話しかけながら、「でも Tomy さんたちは仕事の上で、中国やロシアと全くの関係が無いわけではなさそうですね？」と続けます。

＜ラフマニノフ＞

そこへ hidehiko が口を挟みます。「私の知人が言うには、人間には魂の原体験というものがあるそうだ」と話に加わってきました。

傍にいたラウール君(後のリヒャルト･ウイルヘルム)も興味深げに、「僕も中国の文化や伝統にはとても興味があります。Tomy さん！西洋は文明が進んでいるといいますが、東洋も古くから独自の文化がありますよね。これからも色々と教えてくださいネ！」と真剣な顔で頼み込んでいます。(後にリヒャルト･ウイルヘルムの参考資料を付けておきました。)

先ほどからティーカップを観察していたC.G.ユング君が、「このM&Aの文字はＳ婦人の名前ではないですよね？」とＳ婦人に質問をすると、T教授がニヤリと笑っています。Ｓ婦人は、「それはこの別荘も含めて、伯母さんが所有していたものを譲ってもらったからなのよ」と答えます。何やら訳がありそうですが、ユング君もそれ以上は聞きにくいようで、「ふ～ん、そうなんだ･･･」と曖昧な受け答えをしています。
Ｓ婦人の住んでいる家には、その伯母さんのゆかりの品が一杯残っているのです。
すると、今度はＴ教授が、「ラウール君、ところで君は普段どこに住んでいるの？」と尋ねました。ラウール君はＳ婦人が頷いたのを確認して、「私がいつも側にいるのに気付かなかったのですか？先日も庭先でお会いしています」と悪戯っぽく答えるのでした。(^^;
横からＳ婦人が言葉を挟み、「週のうち何日かは、庭師に変装して私の手伝いをしてもらっていたのよ。後は、従妹のエミリーの所で暮らしているのよ」と答えるのでした。
先ほどに比べ、Ｔ教授の顔色も大分良くなり、賑やかな雑談の時間が流れていきました。

Tomy が「日本では、僧侶が入魂や抜魂をするという行事があると聞きましたが･･」と話をすると、hidehiko が「それは、魂と身体は別々のものであり、魂は繰り返し循環する輪廻という思想が根底にあるからなのです」と説明し、「そして神社などの遷宮儀式において、彼らは神をも移動させる術を持っていると考えているようです」と付け加えました。『復活』と『再生』は全く違う観点から出てきているのですが、その点で、中国と西洋とは考え方が似かよっていそうです。

その日のＴ教授の日記には、こんなメモが残されています。

古代では、自然の恵みに感謝して、八百万の神を祭るというが
歴史に残る宗教は、アミニズムに通じ宇宙的なスケールを持ち
陰陽道とは、自然の持つ力（パワー）をいかに引き出すのか？
多神教に比べると、一神教とは新興宗教（排他的）である。
エジプトの復活に関する考え方、キリスト教、中国との関係は？
人々は、復活を恐れるから相手を根絶やしにするのでは？？
日本の思想では怨霊が取付くことはあるが、肉体は滅び去る。

Ｔ教授、メモ書きから見ると、色々な人と交流があるようです･･･

Tomy やユング君が興味を持ったウェッジウッドは、陶磁食器メーカーとしても有名で、1759 年、『イギリス陶工の父』と言われるジョサイア・ウェッジウッドが、29 歳の頃に開業しました。英国陶芸の金字塔として世界中から高い評価をされ、独特の白く光り輝く『ファイン・ボーン・チャイナ』という陶磁器はイギリスの紅茶文化に多大な影響を与えたのです。このように、S 婦人の周りには多くの人達が集い、気の向くままに意見を交換したり、情報を持ち寄るサロンの趣もある場所なのでした。

そして、ユング君とラウール君（リヒァルト・ヴィルヘルム）の関係はその後も長く続くのです。
＜下記は、リヒァルト・ヴィルヘルム著「易経」英語版に**「ユングが送った序文」**より引用＞

易経は、証明や結果までそえて示すものではない。
それは、みずからを誇ることもないが、近づきやすいものでもない。
それは、自然の一部であるかのように、自分が発見されるまで静かに待っている。
彼は、事実を与えるわけでもなければ、力を与えるわけでもない。
しかしながら、自己を知ることを愛し、知恵を知ることを愛する人びとのためには、
まことにふさわしい書物であるように思われる。
この書の精神は、ある人びとにとっては昼のごとく明らかである。
他の人びとにとっては、それは黄昏のように影を帯びている。
そして第三の人びとにとっては、夜のように暗い。
それを好まない人はそれを用いるには及ばないし、それに反対する人は、
それを真理だと認めなくて はならない義務もない。
ともあれ、今は彼を世に送り出そう。
その価値を洞察することのできる人びとから愛されるように…

19 世紀後半の歴史を振り返ると、C.G.ユングを取り巻く色々な出来事が見えてきます。特にヨーロッパにおける芸術の世界では、社会的な不安を背景に著名な作家や人物が活躍しています。　今回は、その一部を紹介しておきます。

＜以下、HP より引用＞

ロンドンでは「鬼才」「世紀末の異端児」と呼ばれたオーブリー・ビアズリーの黒白の鋭いペン画が話題をさらい、多くの人々がエドワード・バーン＝ジョーンズの描く美しい世界にため息をもらした。オスカー・ワイルドがファム・ファタール（運命の女）を描いたグロテスクで官能的な戯曲『サロメ』が大成功を収め、その英語版にはビアズリーの挿絵が添えられた。絵画ではオディロン・ルドンが華麗で幻想的な作品を発表して話題となり 聖書や神話の一節を好んでテーマとしたギュスターヴ・モローもその精緻な作風が人気を集めた。

パリでは、のちに「小さき男、偉大なる芸術家」と賞されたトゥールーズ＝ロートレックのポスターやモラヴィア出身でグラフィックデザイナーとして活躍したアルフォス・ミュシャの版画・ポスター・挿絵などが芸術分野に新機軸を開き エミール・ガレやドーム兄弟などのガラス工芸がもてはやされた。

19 世紀のウィーンでは、グスタフ・クリムトの描く官能的で退廃的な絵画が話題をさらい オットー・ワーグナーの建築はその機能美が注目を浴びた。ボヘミア生まれのグスタフ・マーラーはウィーン宮廷歌劇場の音楽監督とウィーン・フィルハーモニーの指揮者を務めてウィーンの空気と人々の心を震わせている。　文芸の世界では 16 歳にして詩集が認められた早熟な天才フーゴ・フォン・ホーフマンスタールが現れた。

スペインのカタルーニャでも、のちに巨匠と呼ばれるアントニ・ガウディが有機的な曲線を多用した独創的な表現を用いて、建築に新地平をひらいた。スイスではアルノルト・ベックリンの『死の島』、さらにイタリアのジョヴァンニ・セガンティーニの『嬰児殺し』はともに死を題材にした絵画であるが、島、髪、樹木などにみられる象徴主義的な表現は、他の作品や芸術分野でも顕著にみられる世紀末芸術の特徴といえる。

ベルギーのジェームズ・アンソールやフェルナン・クノップフ、ノルウェーのエドヴァルド・ムンクなど、いずれも象徴性の高い絵を描いたこの時期の画家たちは、そろってサロメやオルフェウスを描いた。そしてまたニンフやメデューサ、スフィンクス、牧神など、エキゾティックな題材を好んで取り上げる傾向が著しい。

フロイトの精神分析への貢献としては、ヒステリー患者の精神疾患の原因が幼児期の性的虐待にあるということを疑うものであったため、後に非常に批判を浴びたがこの理論が果たした貢献は大きい。　それはこの理論によりフロイトが幻想の世界に目を向けたという点である。つまり空想と現実の差異が何らかの葛藤を生み出し、心にひずみが生じる事を説明した点でこの理論は画期的であった。

このあとは＜T 教授＞に関連する人々の事項をまとめておく事にしますが、大分輪郭が見えてきたようです。

カール・グスタフ・ユングは、フロイト（1856－1939）をはじめとする精神分析学の心理療法家たちとは異なり、当時いまだに発展途上にあった精神医学の研究者であった。精神医学の課題は、人間の精神つまり心（魂）に起こる、変調あるいは病を研究し、身体医学において成功したように、病よりの治療法を確立することが大きな目標としてあった。

しかし、精神の病とは一体何なのか。古代ギリシアにおいては、てんかんは神のもたらす神聖な病だと考えられていたが、近代ヨーロッパはそのような見方を否定した。とはいえ、それでは「てんかん」とは何で、どのような原因で起こるのか、理解していた訳ではない。広義に「狂気」とは何なのかが、定かでなかった時期と言える。

また、当時のドイツ・スイスの精神医学界において、ジークムント・フロイトを評価し、精神分析を肯定的・積極的に承認したのがブロイラーであったことも重要である。ユングはチューリッヒ大学精神科の講師であり、ブロイラーの後継者候補として有力な立場にあった。精神分析へのユングの接近は、ブロイラーの承認を得たもので、更に、ブロイラーはそのようなユングに期待したとも言うべきである。

スイスのブロイラー（1857－1939）は、＜Ｔ教授＞の疾病概念をほぼ継承しつつ、精神が有機的な要素の連合として機能しており、この連合が何かの理由で乖離・分裂するとき、早発性痴呆の症状が生じるとし、早発性痴呆は必ずしも、「早発性」ではないことも考慮した上で、これを「精神分裂（Schizophrenien）」と名づけた（1911 年）。

ブロイラーは分裂病が、単一の精神疾患ではなく、機制の異なる複数の疾患の総称（症候群）である可能性を主張しており、複数形で表現した。後に、単数形 Schizophrenie と書かれるようになる。現代の知見においても、統合失調症（精神分裂病）は単一の精神疾患ではなく、複数の疾患か、更にそれらが輻輳したものであるとの考えが有力である。

ブロイラーの説では、精神の要素の有機的統合が乖離分解して、快復困難となっているのが分裂病である。しかし、乖離してもなお「意味」がその言動に残っているということは、精神分裂病患者の言動が、まったく無意味ではなく、何らかの方法を通じて了解可能であることを示唆する。精神の乖離は、心のどこか深い領域で、なお有機的な意味連関を維持していることになる。

ユングは精神分裂病の治療に光明を与えた先駆けと見ることができる。精神分裂病者独特のメッセージの理解をしようとする姿勢は、一定の効果を有し、精神分裂病者が「この人なら理解してくれる」という人と向き合えた時に精神分裂病者 であることをやめる、といったユングの洞察は、後に R.D.レイン等によって評価された。

いよいよ、次はラストバッターの由佳さんが登場です。
お疲れ気味のＴ教授、まだまだ謎の多いＳ夫人など
今年もよろしくお付き合い下さい。